

The possibility of Color Geography

MITSUBOSHI Muneo

Key words: Lenclos, color, geography, local color, environment

Abstract

Jean Philippe Lenclos' "The Geography of Color" was argued on the basis of his lecture in Japan, 2000, and his way of collecting and analyzing colors was briefly reviewed.

The main purpose of this article was to propose the linkage of color study and geography for Color Geography as a discipline. It is not a newly born discipline, but rather the one that gathers various color studies having been made under different designs, where geographical or cross-cultural comparison is essential.

Such studies must be included into Color Geography as those on local colors and regional natural colors, cross-cultural comparisons of color preference, studies on color names in different languages, as well as the colors of signs in different regions and so on.

It is quite stimulating to analyse color phenomenon with geographical points of view. Such an approach will, it seems to the author, produce fruitful outcomes.

色彩地理学の可能性

三 星 宗 雄

キーワード：ランクロ、色彩地理学、色、色彩、地理学、風土色、環境

はじめに

2000年9月25日、日本色彩学会主催の環境色彩公開講演会で、ジャン フィリップ ランクロ (Jean Philippe Lenclos) (国立パリ高等装飾美術学校教授) の講演が行われた。演題は「ランクロ教授の色彩世界－景観の色彩文化・過去からの遺産、未来への希望」であった。ランクロは「色彩の地理学 (the geography of color)」という言葉の生みの親である。

ランクロの来日はそれほどめずらしくなく、1961年第1回日仏交換留学生として来日し、2年間を主に京都で過ごした。1970年には大阪万博フランス館の色彩設計を担当し、同時に東京の色彩の調査を行った (調査結果の発表は1971年)。また1997年京都で開催されたAIC (国際色彩学会) で講演を行っている。

「色彩の地理学」という言葉は必ずしも一般的ではない。著者が知る範囲の大学などで用いる色彩のテキストでは読んだことがないが、環境色彩計画関連のテキストの中で、「地方色の調査・研究」として記載さ

れている（例 東京商工会議所、2003）。著者は心理学出身であり、どちらかと言うと色彩の原理について学ぶことが多く、一方環境色彩計画関連のテキストの執筆者は色彩計画家やペイント関係またはデザイン関係などの実際の仕事に携わる人たちが多く、その扱いの違いの一因であると思われる。実際に顧客から注文を受けて、環境色彩の設計に従事する立場になると必携となる知識であるのかも知れない。もっとも環境色彩計画関連のテキストのその項の執筆者は以前パリのランクロのアトリエに留学した経験のある方であるから（吉田、2005）、それが理由である可能性はある。いずれにしても大学の中の色彩教育と実際の色彩の活用との間のギャップを感じさせる色の側面である。

本論文の題目は色彩地理学（color geography）であり、「色彩の地理学」ではない。「色彩の地理学」はランクロの仕事に関わる固有名詞である。本論文では、ランクロの「色彩の地理学」についての考察だけでなく、それ以外の地理学的視点に立った色彩研究について考察することを目的とする。さらには色彩地理学が1つの研究領域あるいは学問領域として構想することの現実性または可能性について記してみたいと思う。著者の浅学が露呈することは仕方がないこととして、しかしそれ以上に「色彩」と「地理」というこれまであまり表立っては考えられてこなかったリンケージは色彩の研究者の間にもっと浸透してもいいのではないかという思いからあえて考えを述べてみたいと思う。

1. ランクロの「色彩の地理学」

1.1 色彩の地理学の目的

ランクロは上述の2000年の講演の中で、以下のように述べている（ランクロ、2001）。「都市や田園、建築景観や自然景観、それぞれの環

境を特徴づける色彩に注意深く目を向けると、微妙でニュアンスに富んだ色彩、いきいきとして強いコントラストを示す色彩など、とらえきれないほど沢山の色彩の諧調が結びついていることがわかります。これら色彩のすべてが、ひとつの文化、その固有性、歴史に帰属していることが明らかになります。世界のどの国、どの地方でも、色彩言語は、土地の記憶、素材の特性と使用法、信仰と象徴性、光と風土に根づいています。伝統と習慣は時の経過とともに固有の言語をしるしますが、そこにはまたローカルカラーのさまざまな構成要素が組み込まれているのです」

ランクロの文章には、自然景観という言葉が用いられているが、色彩の地理学の対象は基本的には建築景観である。歴史の中でその土地の建築物に刻まれた色彩をカラーパレットとして保存し、それらの色彩を文化資産の景観の保護・維持に役立てるというのが目的である。

ランクロは言う。「たとえば比較文学のように色を比較することです。…自分の個性的な色を認識することはむずかしく、比較したり、対照的なもの、相違を認めた時はじめて見えてくるもの…。」上述したように、ランクロは1961年から2年間、京都で過ごしたが、そこでの色彩が母国フランスにおけるカラーパレットと異なることを認識した時、色彩に注意を向けるようになったと記している。

ランクロは各地の建築物の色彩の収集を行っただけでなく、実はファッション、バイクやバスを含めた自動車の外装および内装、さまざまなプロダクトデザイン、グラフィックデザイン、テキスタイルやインテリア、さらには集合住宅のデザインおよび色彩設計においても大きな足跡を残している（Fujimoto, 1989）。むしろ職務上そちらが本職であり、街並みの色彩調査はそれに付随して手掛けた感がある。

1.2 ランクロのカラーパレット

ランクロのカラーパレットの作成は単純なものではない。カラーパレットの作成は2段階から成る (Ragon, 1989)。まず現地での色彩の収集 (on the spot site analysis) である。現地において街の見え方をクレヨンや写真により記録する。建築の壁、屋根、扉やシャッター等すべてのパーツの色彩について調査を行う。その際写真係とスケッチおよびサンプル収集係の2人1組で行うと効率が良いとしている。また写真は必ずしも色彩の忠実な再現にはならないが、しかし記録としては大変貴重なものとしている。

建築の外装材さらにはその土地の土や木の葉や苔も共に収集する。サンプルを収集できない場合には、調査用の色票を用いてそれらの色彩を記録する。その際遠景、中景、近景において色彩を記録する。

第2段階は、アトリエでの目による分類 (a visual analysis of the component colors) である。収集された色彩はカラーサンプル (色票) に変換される。これらのカラーパレットは3つのグループから成る。第1グループは、(1) 街の外側から見た建築のファサードと屋根の全体的な色彩 (general color)、(2) 街の中から見た建築のファサードと屋根の全体的な色彩、(3) 色のタッチ。すなわち建築の細部、ドア、窓、シャッター、窓枠、土台回り (plinth)、の色彩である。

第2グループは、1つの建築のすべての色の等サイズのサンプルをまとめる。こうすることによって使われている色の違いの範囲が分かる。またそれらのサンプルの数は使われている色の面積に比例するので、それらの色のバランスが分かる。

第3グループは、1つの建築のすべての要素、すなわち屋根、ファサード、窓枠、土台回り、土、窓、シャッター、の色の範囲を記録する。これはそれらの要素の主調色 (dominant color) を示す。

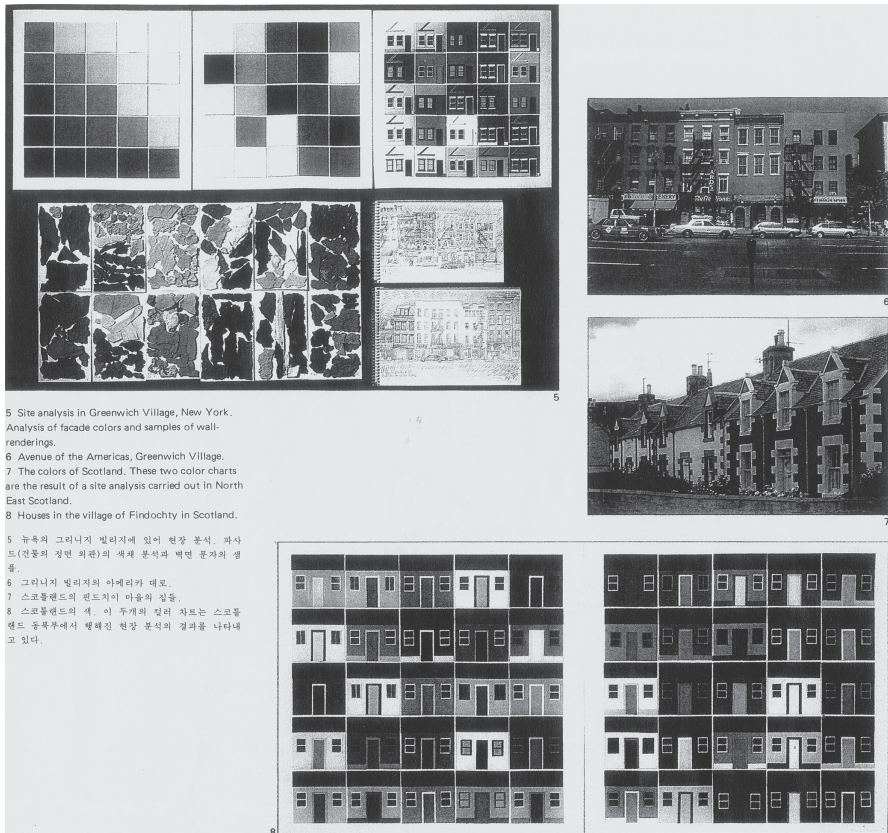


図2 ニューヨークのカラーパレット (Fujimoto, 1989)

彩を観察し、データ化するという方法や収集した色のデータを実際のサンプルとして残すという方法には学ぶべき点が多い。何か西欧の色彩研究の、というより西欧の一般的な科学研究の「骨太さ」を目の当たりにしているようである。

建築の色彩を遠景、中景、近景の3つの段階において分析するというやり方は環境の色彩を扱う時必ず生じる問題である。つまりある環境にはさまざまな色が隣接し、どの色をもって当環境の色としたらいいのか

簡単には分らないのである。そのための1つの解決策は画像（色彩）を最小化し、その時に見える色（それは様々な色が混色＝併置混色することによって生じる）によって代表色（上で言う general color）とするやり方である。この併置混色を利用するという方法は確かに西欧の色彩研究の1つの分析ツールである（例 調和する2つの色の色相あるいはその割合の決定、福田、1985; 三星、2010d）。

しかしこの方法にも問題がないわけではない。自然の光線の中で見る建築の色とアトリエで再現される色とではやはり異なるのではないかという疑問が生じる。これに対してランクロはこう答える。「私が風景の色彩を分析するときはまず実際にそこに存在する素材であって、光の作用は色の諧調に加えられるもの、補充するものです」と（ランクロ、2001）。とは言うものの、彼はアトリエでパレットの作成を行う時は、自然光の下でマッチングを行っているのである（もちろん多少は光線の影響は残るであろう）。

後述するように、三星（1995；2011a）はやはりその場で（on site = in situ）、自然（主に植物）の色彩を色彩計で測定してデータを収集した。その x, y 色度座標データから色名に変換する際、実際にその場で見た目で判断した色名（著者のみによる観察であるが）を基準にして全体の色度データを色名に変換したが、それは現場における、すなわちその時の自然光の下における、色の見えに関する情報を失わないためであった。そういう意味では、ランクロの場合、採集した素材ではなく、実際に見えた色に近いクレヨンによるスケッチの色にもとづいて再現した方が良かったのではないと思われる（おそらくそうしているであろう）。

もう1つはカラーパレットを作成する場合、ランクロ1人の目を通してマッチングを行っていることである。上の三星（1995；2011a）の場

合もそうであった。カラーマッチングにおける個人差あるいは個人内変動も否定できない。さらにはランクロ自身の加齢による色の感受性の変動も考えられる。

とは言え、もし複数の観察者のカラーマッチング等を行っていたとしたら、膨大な色データのサンプル化は困難であるに違いない。多少の誤差はあるものの、カラーパレットの作成自体の方が重要と考えるべきであろうか。

2. 色彩地理学

2.1 色彩地理学の範囲

上で述べたように、本論文で扱うのは「色彩の地理学」(ランクロ)ではなく、「色彩地理学」である。ランクロが色彩の地理学の中で対象としたのは、主に建築物であった。色彩地理学ではその対象を建築物だけでなく、色彩に関するすべての現象と考えてはどうであろうか。すなわち建築物の色彩、自然の色彩、色彩の嗜好、ファッションの色彩、風土色、色名の分布などである。

ちなみに地理学は「地球の表面と住民の状態並びにその相互関係を研究する学問」とされる(広辞苑第4版)。「地球の表面」(自然地理学の対象と考えられる)に対応するものとしては自然の色彩が、「住民の状態」(人文地理学の対象と考えられる)に対応するものとしては色彩の嗜好や色名の分布、ファッションの色彩が相当しよう。建築の色彩はその両面にまたがる対象と考えられる。いずれにしても「地球」という概念がポイントである。したがってたとえば環境色彩の設計などの際に行われる、対象となる施設の周囲の色彩調査などは色彩地理学には入らない。しかしもちろんそれは相対的なもので、その線引きは明確でない。

ランクロは「色彩地球学」という言葉も使っている（ランクロ、2001）。

2.2 色彩地理学に含まれるもの

(1) 風土色

風土色の研究は色彩地理学とほぼ同義であろう。和辻哲郎（1979）は、その著書『風土－人間的考察』の中で、「風土と呼ぶのはある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称である」と述べている（p.9）。したがって風土色はそうした要素から生まれる色彩と考えることができよう。

佐藤（1986；1999）は色彩嗜好の地域差に注目し、色彩嗜好の地域差をもたらす要因として、気温、湿度、日照時間、土質色、および自然光の緯度差を挙げている。そうしたデータに基いて、暖色系を好む南日本地域、寒色系を好む北日本地域、清色系を好む太平洋沿岸地域、濁色系を好む日本海沿岸地域の4地域に大別し、最終的には色彩嗜好の異なる10のエリアに分けている。暖寒色の好みの分水嶺は本州の中央部にあり、新潟、長野、静岡（寒色型の西端）と富山、岐阜、愛知（暖色型の東端）の間にあるとしている。彼はそうしたデータをカラーマーケティングにおいて活用することを目的としている。

土質色に関して、中国が北部の黄土地帯、中央部の黒土地帯、南部の赤土地帯に分けられるのはよく知られている（三星、2010a）。ここに詳細を記すことはできないが、その背後にある文化を想像することができる。

以前著者が南米アマゾン地域で色彩の調査を行った時、その赤色の土に驚いたことがあった（三星、1993；1994）。著者はそれまで国内で赤土というものを見たことはあった（であろう）が、それよりもはるかに鮮やかな赤土というものを見たことがなかったからである。沖縄で色彩

の調査を行った時もやはりその赤土に気がついた。それは熱帯、亜熱帯の違いはあるが、両地域の自然の共通性を強く感じた瞬間であった。土壌の色というのは予想以上にその地域のイメージの形成に強い影響を与えるものである。

尾崎+佐久間（2006）は風土の色は、自然環境にかかわる色と歴史、文化にかかわる色に分けられるとし、前者を構成する色としては土壌の色、植生の色、花の色、空と水の色を、後者を構成する色としては歴史的建造物の色、祭りの色、工芸品の色を挙げている。彼らはそれらのデータを各種色彩計画に活用することを目的としている。

尾崎+佐久間（2006）の風土色の構成要素は、土壌の色を除き、上の佐藤（1986；1999）の風土色の構成要素を補うような形になっている。その中で植生の色はその地域のイメージの形成に非常に大きな影響がある（三星、2010a）。沖縄における赤土は熱帯アマゾンのイメージを彷彿とさせたが、一方サクラや松（リュウキュウマツ）、ススキの存在は逆に日本とのつながりを強烈に感じさせた（図3）。ガジュマルは沖縄と中国福建省との間の共通のイメージ形成の大きな要因となった（図4a、4b）（三星、2010a）。

沖縄で沖縄を象徴する色について調査した際、赤、緑、青が多かったが、その理由は空や海の色と並んで鮮やかな花の色を挙げた人が多かった（三星、2010b）。赤に関して記すと、沖縄赤瓦の人工物の赤よりもハイビスカスなどの花の赤をよりどころとしている人が多かったのである。

世界の祭りの色については枚挙にいとまがない（たとえば Birren, 1963）。それらについて記す余地はなく、またそれらをまとめるのは著者の力量を超えるものである。1つだけ記すとすれば、沖縄のエイサー祭りに用いられる紫色である。上の佐藤（1986；1999）によると、沖縄



図3 リュウキュウマツ（沖縄 中城市）



図4a ガジュマル（沖縄 宜野湾市）



図4b ガジュマル（中国福建省 廈門市）

エリアは赤が強烈に映えるエリアとなっているが、その中であの紫色は対照的で、コントラストの美によって忘れられない印象を与えている。

（2）自然の色彩

三星（1994；1995；1996）は熱帯アマゾン地域において自然（特に植物）の色彩の調査を行った。色彩輝度計を用いて、その場で（on site）植物の花や葉の x, y 色度データを収集した。またそれらを色名に変換した。そのデータの一部を図5（a、b）、6および表1に記す。

植物の色（色度）の分布については、日本、アルゼンチンおよびアマゾンで大差がなく、いずれの地域においても緑～青緑の領域には色が欠

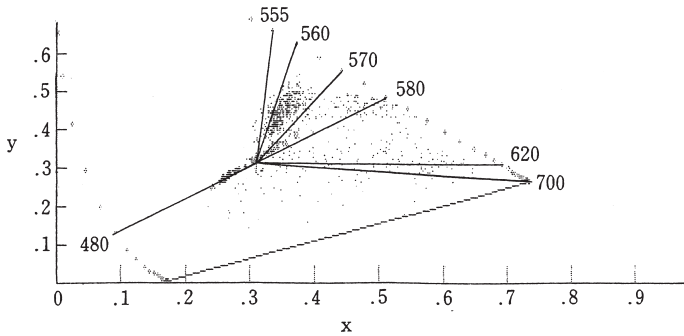


図 5a アマゾン（7～8 月）における植物および空の色度分布
中央の+印は標準光源 C の色度座標、周囲の数字は主波長（nm）を示す（以下同様）。

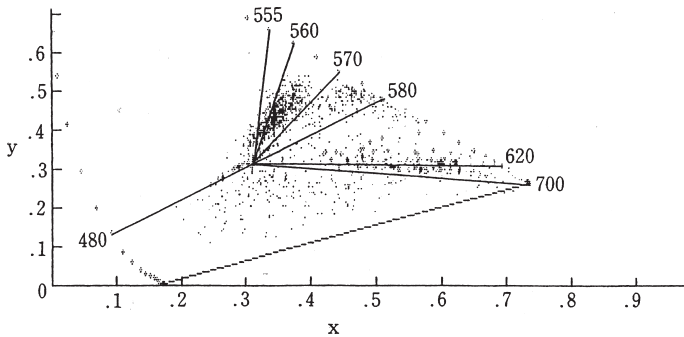


図 5b 日本における花（花弁、花芯）、葉、果実、空その他の色度分布
（三星、1993）

落しているか最小であった。三星（1995；2011a）はそこから「閉じ込められた色：緑」と呼んだ。植物の葉は決して緑ではなく、測色学的にはほぼすべて黄緑色であった。三星（1995；2011a）はいわゆる慣用色名で、赤や、黄、青色に比べて緑色の中に入る色名が極端に少なく、またその大半が鉱物に由来する色名（例 エメラルドグリーン）である事実がそれを裏付けているとしている。

花の色に関しては白、赤、黄、紫が4大色相で、その傾向は日本、ア

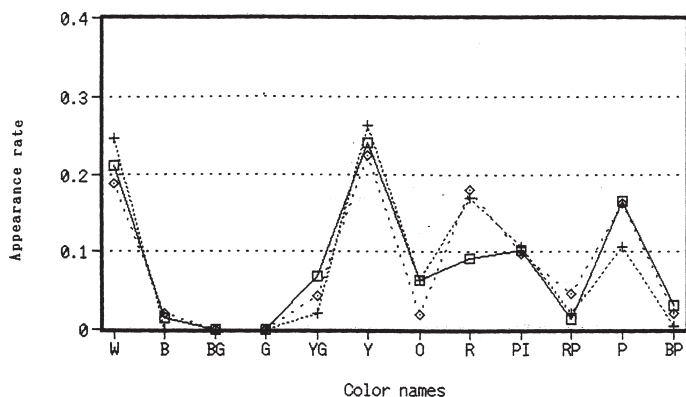


図6 花卉の色名の分布。日本 (◇)、アマゾン (+) およびアルゼンチン (□)。

ルゼンチンおよびアマゾンで差がなかった。また花（花卉）の色だけでなく、花芯や葉、木の実の色の純度（彩度）に関しても、データ収集時の季節の違いがあるが、概してそれら3つの地域で大きな違いが見られなかった。そこから三星（2006b）は、熱帯は原色の世界という「ドグマ」がどこから来ているのかという疑問を発している。

(3) 色名の分布

極北の地に住むイヌイットの人たちには「白」に関する色名が数10あるという（村山、1988）。冬季に白一色に包まれた環境の中で白のわずかな差異を気象の変化や地理的な場所の特定の手掛かりに用いる必要があるのであろう。

日本のJISで規定されている白の慣用色名は、白（N9.5）、胡粉色（黄みの白、2.5Y9.2/0.5）、生成り色（赤みを帯びた黄みの白、10YR9/1）象牙色（黄みのうすい灰色、2.5Y8.5/1.5）および銀色ぐらいである（JIS, 2007）。灰色は象牙色以外に7種類ほど指定されている。外来の色名としてはホワイト、スノーホワイト、アイボリーだけである。同じようにグレイにはアイボリー以外に9種類指定されている。JIS系統色名

表 1 日本、アマゾンおよびアルゼンチンにおける対象別および季節別輝度純度データ。() 内はサンプル数。

		日本	アマゾン	アルゼンチン	平均
花卉	春	.4459 (385)		.4175 (189)	
	夏	.4566 (299)		.4548 (205)	
	秋	.5108 (188)			
	冬	.5853 (24)	.4804 (236)		
	平均	.4668 (896)	.4804 (236)	.4369 (394)	.4612 (1526)
花芯	春	.7010 (103)		.9011 (24)	
	夏	.7423 (81)		.9119 (17)	
	秋	.7970 (56)			
	冬	.8445 (5)	.6849 (53)		
	平均	.7395 (245)	.6849 (53)	.9056 (41)	.7511 (339)
葉	春	.5618 (695)		.5926 (558)	
	夏	.5408 (381)		.5371 (654)	
	秋	.5083 (426)			
	冬	.4291 (59)	.5248 (446)		
	平均	.5371 (1561)	.5248 (446)	.5628 (1213)	.5451 (3220)
果実	春	.6126 (45)		.6415 (25)	
	夏	.5813 (81)		.6405 (49)	
	秋	.5279 (156)			
	冬	.4817 (34)	.6083 (39)		
	平均	.5486 (316)	.6083 (39)	.6408 (74)	.57 (429)
平均		.5339 (3018)	.5264 (774)	.5455 (1722)	.5365 (5514)

の無彩色では、白、灰色、黒の基本色名を指定し、灰色についてはうすい、明るい、中ぐらいの、暗いの4種の修飾語を指定している。白に近い灰色としてはうすい灰色と明るい灰色ぐらいであろうか。したがって日本における白に関係するすべての色名は合わせて10種類ほどである。数10種類の白というのがいかに大きい数であるかが分かる。

動植物などから借りたJISの慣用色名においては、わが国において

は植物から借りた色名が圧倒的に多く、約 50% に及ぶ。わが国の植生が非常に豊かで、かつ私たちの生活に深く関わりを持っていることを示す。ちなみにヨーロッパなどでは鉱物に由来する色名が多い。

色名の地理学に関しては Berlin & Kay (1969) と Kay & MacDaniel (1978) の研究を忘れることはできない。彼らは世界各地の色彩語を分析し、色彩語が分化する順序には文化の違いによらず、一定の法則性があることを示した。それを図 7 (a, b) に示す。彼らの説には異論もあるようである。

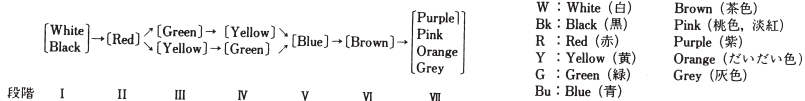


図 7a バーリンとケイの基本色彩語彙進化のモデル (色のはなし編集委員会, 1986)

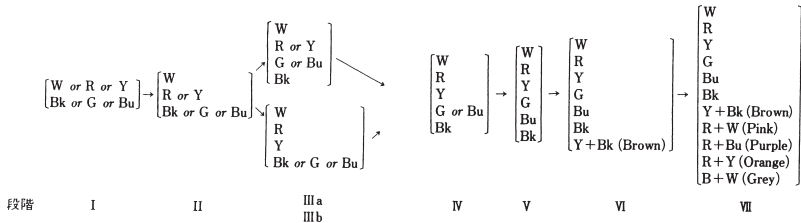


図 7b ケイとマクダニエルの改訂基本色彩語彙のモデル (同上)

(4) 色彩の嗜好性

色彩の嗜好性に関しては多数の研究があるが、その中で千々岩 (1999) は世界 20 ケ国・地域における調査を行った (対象は大学生 5,375 名)。それによると、「さえた青紫」、「さえた赤」および「黒」が上位を占めた。特にさえた青紫は、20 ケ国・地域中 11 ケ国・地域で第 1 位を占めた。青紫、赤、黒、白、青など数色が全体の約 70% を占めた。この結果は Guilford (1940) や Eysenck (1941) が言うように、色彩の嗜好には文化を超えた普遍性があるという考えに有利なものである。

車・野口（2005）は美術大学の学生や美術教師など、わが国と韓国の色彩経験が豊かな人々とそうでない人々との色彩嗜好の国際比較を行った。それによるとわが国および韓国の美術の専門家と非専門家の4つの被験者群のすべてにおいて黄、赤、青の色が好まれる傾向が見られた。そこから彼らは、色の嗜好性には文化や美術学習の違いを超えた共通性があると結論づけた。

それとは別に車・横田・三星（2010）は日本の社会人、韓国の社会人および日本在住の韓国社会人を対象とした色彩嗜好の調査を行った。それによると、韓国の社会人が好む色彩の上位5色は白、鮮やかな緑、鮮やかな黄、鮮やかな青、鮮やかな紫であった。一方日本の社会人の上位5色は白、鮮やかな青、鮮やかな緑、黒、うすい黄であった。面白いことに日本在住の韓国社会人ではその中間を示す結果となった。このデータの解釈は難しいが、三星（2010c）は生得的というよりは、文化の共通性によるものではないかとした。

（5）トイレマーク

星野（2011a）は日欧のトイレマークの色を調査した。それによると男子用トイレマークが黒または青、女子用トイレマークが赤またはピンクという固定した色彩になっているのは日本など明らかに少数派で、大部分の国では男女で色彩に差がなく、そのデザインで区別していることを実証した。図8にその例を示す。星野（2011a）は、それを男は青や黒で示される理性や冷静を、女は赤やピンクで示される感情や熱情を表すジェンダーバイアスの表れとしている。

ただとっさの時などトイレマークの色が同じであると区別するのに時間がかかることもあり、場合によっては間違って入室し、変人扱いされる恐れもある。そうした標識としての機能とジェンダーバイアスとの折り合いをつけるための方策はいろいろなところに見られるが（三星、



図8 トイレマーク（米国デトロイト市日本領事館）

2010c) その社会または文化が決めることなのであろうか。

ただし色の見え方が他の多くの人と異なる色弱者への配慮ということになると、話は別である。また周囲の環境の調和を乱すようなマークは場所によっては配慮されるべきものと思われる。そうした環境に配慮したトイレマークは今や珍しくない。通常は小さくするか、またはあまり目立たない場所に付けるという方法がとられることが多い（三星，2006a）。

（6）広告看板

日本における騒色公害の意識を高める契機となったのは東京都バスの車体塗色事件（1981）、日本マクドナルド広告ネオンサイン事件（1985）および高崎ビックカメラの建築物外壁塗色事件（1986）である。三星（2006a, 2011c）はそれらを3大騒色公害事件と呼んだ。その中で騒色公害という言葉を日本の社会に浸透させたのはマクドナルド広告ネオンサイン事件であった。その後わが国のマック店で騒色に配慮した看板の色を採用する店が目立つようになった。マックの企業カラーである赤、黄、白のうち批判の強かった赤色の採用をやめ、茶色や白に変更する店が現れたのである。そうした変化はある意味でその地域における色彩意識の



図 10 茶色の看板のマック店（鎌倉駅前）



図 11 白いマック店（京都）<http://www.biwa.ne.jp/~yatchan/photograph.htm>

高まりを示し、マック店の看板の色は当該地域の色彩意識のバロメータの役割を果たしている（三星、2006a；2011a）。その例を図 10 と 11 に示す。

しかしヨーロッパでは以前から非常に厳しい色彩規制を行っていた。図 12 はパリ・シャンゼリーゼ通りのマック店である。赤色はなく、わずかに黄色と白が残っているだけである。図 13、14 にそれぞれソウルと厦門（中国福建省）で見たマック店の看板である。ソウルのマック店の看板では赤色は見られない。非常に環境に配慮した看板である。



図 12 パリのマクドナルド店（撮影 畑田明信氏）

西欧においてこのように色彩の規制が厳しい理由は何であろうか。前



図13 マック店 (ソウル)



図14 マック店 (廈門市 中国福建省)

出の尾崎+佐久間（2006）は記している。「パリのシャンゼリゼ通りと原宿の表参道の街並みを比べてみると、一目でその違いが分かる。…通りを歩く人の服装の色彩が決定的に違っている。パリジェンヌの服装は、一見非常に多彩に見えるが、実はそんなに多くの色は使われていない。西欧では、長い歴史の中で、子どもの時から、家庭でも学校でも、美しさ、調和ということについて訓練を受けてきているので、誰もが調和する自分の色を知っているからである」。教育の効果であろうか。

図15と16はコンビニエンスストアの看板である。コンビニエンスス

トアの看板の色彩についてもやはり地域差があり、やはりヨーロッパにあっては規制が厳しい。しかしわが国においても環境に配慮した看板が見られる（図16）。



図15 セブンイレブン（コペンハーゲン 撮影 桐石雄毅氏）



図16 「白黒セブンイレブン」(草津、群馬)

(7) 公衆トイレ・自販機

公衆トイレの調査は上のトイレマークの色彩の調査とは別個のものである。必ずしも色彩だけでなく、その全体的なデザインについての調査である（三星、2008）。公衆トイレというもっとも目立たない場所の色彩およびデザインに対するこだわりが見られる地域があり、その傾向はいくつかの例外を除き、西高東低または南高北低の感がある。沖縄において最高に達する印象である（三星、2008）。

自販機にも同じような傾向が見られる（三星、2011b）。図17は著者には望ましくないとされる単体で、孤立して立つ自販機の例である。一方図18は遊び心のあるすばらしい自販機である。

自販機の色彩についてはNPO法人「公共の色彩を考える会」の考慮

の対象になっており、各地でその対応が見られる。上の公衆トイレや自販機あるいは歩道のベンチ、橋の欄干など目立たない空間に、さりげない工夫がなされているのを見ると、小さな驚きを覚えるのは著者だけではないであろう。



図 17 単体で立つ望ましくない（と思われる）
自販機（小金井市、東京）



図 18 遊び心のある自販機（旭山動物園、旭川市）

3. 色彩地理学から期待されるもの

(1) 自己の色彩認識の発見

上に述べたように、ランクロは「…自分の個性的な色を認識することはむずかしく、比較したり、対照的なもの、相違を認めた時はじめて見えてくるもの…」と述べている。佐藤（1986；1999）も「色彩の好き嫌いには「標準語」に相当するものが欠落しているため、基準とすべき「判断軸」が見当たらない」としている。したがって色彩の比較をすることによって、自分がどのような色彩環境の中に生まれ、育ったのか。最も影響を受けた色彩は何か。自分にとって最も重要な色彩はどのような色彩か。などについて発見する機会が得られよう。

(2) 文化資産の景観の保護・維持

ランクロの色彩の地理学の目標は、上に記したように、「歴史の中でその土地の建築物に刻まれた色彩をカラーパレットとして保存し、それらの色彩を文化資産の景観の保護・維持に役立てること」であった。この目的には、単なる景観の保護・維持のみならず、「建築・まち・美しい景観の創造」（尾崎＋佐久間、2006）も含まれよう。

わが国においては「美しい景観の創造」ということが違和感なく語られるが、実はランクロの講演においては、「創造」という言葉は必ずしも前面に出ていない。むしろ「過去からの遺産」、「伝統と習慣」、「歴史的遺物」、「人類共通の遺産」などむしろ「保存」の言葉が目立つ。

18世紀の産業革命後に英国で生まれたとされるアメニティ（amenity）の概念は多面的であるが、スミス（1977）はその構成要素として「公衆衛生」、「快適さ」そして「保存」を挙げている。この保存というコンセプトはランクロの色彩の地理学の中にも通奏低音として流れているよう

に思えてならない。西欧においては保存という思想を私たちには思いもよらないほど高く評価するようである。

(3) 文化の諸相における差異の認識

色名の分布（その多少、偏り）、トイレマーク、公衆トイレ、自販機、コンビニエンスストアの看板の色彩に対する配慮の深浅を通してその地域の色彩に対する感受性の高低、文化の特徴などについて窺い知ることができる。

もっとも分かりやすいのは国旗の色であろう。たとえば緑色はイスラムの社会では第一に神聖な色で、多くのイスラム教国家の国旗に採用されている。それを知らずしてそうした国に立ち入ることになれば、場合によってはトラブルになる可能性があるだろう。

(4) カラーコーディネーションの標準

これは特に自然の色彩のデータに期待されるものである。進化の過程で、動物に目が備わってから数億年が経つ。その間環境の変化があったと思われるが、長い時間にわたって目が慣れ親しんできた環境、特に色彩環境、は目にとってカラーコーディネートされた環境であるとは言えないだろうか。

Judd (1955) は色彩調和の一般原理として、a. 秩序性の原理、b. なじみの原理、c. 類似性の原理、d. 明瞭性の原理を挙げた。この中の b. なじみの原理は、自然で、（目が）馴染んだ色には逆らわない、という原理である。

また中村（1975）は自然景観を「図」と「地」の分化という観点から見た時、図にしかない対象には目が抵抗し、受け入れないとしている。そしてそうした対象として、金属製のガードレール、電柱、コンクリート製の護岸壁などを挙げている。

自然の対象物が持つ色彩の組み合わせは長い間我々の目が慣れ親しん

できた色彩であり、そうした色彩の組み合わせはある種のカラーコーディネーションのお手本になるのではないだろうか。

(5) 動物の色覚メカニズムの解明

自然の色彩の詳細な分析は、そこに住む動物の色覚メカニズムの解明に役立つであろう。いわゆるエコロジカルなアプローチである。

4. まとめ

以上色彩地理学について構想を述べた。色彩地理学は決して新しい色彩研究の分野ではない。爾来風土色、色彩のフィールドワーク、色彩のエコロジカルなアプローチ、色彩嗜好の国際比較または交叉文化的研究などという名前で呼ばれてきたものである。それを色彩地理学という名称でまとめようという試みである。このように、色彩研究においては実質的な「地理学的な」研究はかなり行われてきたが、地理学と色彩研究とを明示的に結びつけられることはなかった。それを明示したのがJ.P. ランクロである。

色彩の機能は外からは見えない内部の状態を表すことである。八久保(2011)は地域の産業構造の変化が景観の変化という形で表れるという発想の下で、景観の研究を行っている。景観または色彩はそういう意味で地域内部で生じている変化を的確に示すバロメーターとなるのである。

色彩研究と地理学とはもっと連携を強めるべき価値があるのではないだろうか。

謝辞

コペンハーゲン市内におけるセブンイレブンの写真を提供し、その使用の許可を快諾してくれた元ゼミ生桐石雄毅氏(2007年度、法学部卒)

に感謝する。

引用文献

- Berlin B. & Kay P. (1969) Basic color terms : their universality and evolution. Berkeley: University of California Press.
- Birren F. (1963) Color: A survey in words and pictures from ancient mysticism to modern science. Citadel Press.
- 千々岩英彰 (2001) 『色彩学概説』, 東京大学出版会.
- Eysenck H. J. (1941) A critical and experimental study of color preferences. Amer. J. Psychol. 54, 385-394.
- Guilford J. P. (1940) There is system in color preferences. J. opt. Soc. Am. 30, 455-459.
- Fujimoto A. (1989) The geography of color. San'ei Shobo Publishing Co. (韓国語版 Kukje, Soel, 1991).
- 八久保厚志 (2011) 私信.
- 福田邦夫 (1985) 『色彩調和の成立事情』, 青娥書房.
- 星野澄子 (2011a) 北欧3ヶ国4都市 (&パリ) に見る色彩とジェンダー, 三星宗雄編 『世界の色の記号－自然・言語・文化の諸相』, 第4章第4節, pp. 292-298.
- 色のはなし編集委員会 (編) (1986) 『色のはなしⅡ』, 技法堂出版.
- JIS 2007 『色彩』, 日本規格協会.
- Judd D. B. (1955) Classical laws of color harmony expressed in terms of the color solid. ISCC, New Letter.
- Kay P. & MacDaniel C.K. (1978) The linguistic significance of the meanings of basic color terms, Language 54, 610-646.
- 公共の色彩を考える会編 (1989) 『公共の色彩を考える』, 青娥書房.

公共の色彩を考える会 web サイト <http://www.sgcpp.jp/>

小西裕美 (2001) ランクロ教授の色彩世界 講演要旨, 日本色彩学会誌 25, 1, 21-24.

ランクロ J.P. (2001) 日本での公開講演に寄せて, 日本色彩学会誌 25, 1, 19-20.

三星宗雄 (1993) アマゾンメモー色彩・環境・熱帯雨林-, 神奈川大学人文研究 119, 43-63.

三星宗雄 (1994) アマゾンの色彩: その測色学的研究, 神奈川大学心理・教育研究論集 13, 76-96.

三星宗雄 (1995) 閉じ込められた色: 緑-自然の色彩の測色データおよび色名による分析-, 神奈川大学人文研究 124, 1-32.

三星宗雄 (1997) アマゾンの空の色, 神奈川大学心理・教育研究論集 16, 78-89.

三星宗雄 (2006a) 『環境色彩学の基礎』, マックローリン出版.

三星宗雄 (2006b) 熱帯アマゾンの色彩-「熱帯は原色の世界」は果たして本当か, AFT ジャーナル 31, 1-4.

三星宗雄 (2008) 沖縄の色, 神奈川大学人文学研究所報 41, 23-32.

三星宗雄 (2009) 公衆トイレのアンソロポロジー, 神奈川大学人文学研究所報 42, 13-31.

三星宗雄 (2010a) 中国福建沿岸部の色彩と景観, 神奈川大学人文研究 169, 1-23.

三星宗雄 (2010b) 一般市民から見た沖縄の色-那覇市および近郊における聞き取り調査-, 神奈川大学人文学研究所報 43, 1-11.

三星宗雄 (2010c) 韓国色彩事情, 神奈川大学人文研究 171, 1-22.

三星宗雄 (2010d) 調和と美の間: ムーンとスペンサーの色彩調和論をめぐる 2, 3 の問題, 神奈川大学人文研究 172, 29-54.

- 三星宗雄（編著）（2011a）『世界の色の記号－自然・言語・文化の諸相』，お茶の水出版。
- 三星宗雄（2011b）風景の中の自販機，神奈川大学人文研究 174, 95-113.
- 三星宗雄（2011c）日本における騒色公害の系譜とその解決，神奈川大学人文学研究所報 45.（印刷中）
- 村山貞也（1988）『人はなぜ色にこだわるか』，KK ベストセラーズ。
- 永田泰弘（2001）色彩地理学の創設者ランクロ教授の 街並みを〈色〉でとらえる－色彩地理学の方法，日本色彩学会誌 25, 1, 25.
- 中村良夫（1975）『風景学入門』，中公新書。
- 新村 出（編）広辞苑 第4版，岩浪書店。
- 尾崎真理＋佐久間彰三（2006）『風土色による色彩学のすすめ 建築・まち・美しい景観の創造』，彰国社。
- Ragon M. (1989) World authority on color analysis Jean Philippe Lenclos, In Fujimoto A. The geography of color. San'ei Shobo Publishing Co.,1989（韓国語版 Kukje, Soel, 1991）.
- 佐藤邦夫（1986）『風土色と嗜好色 個性化時代の色彩計画』，青娥書房。
- 佐藤邦夫（1999）『日本列島 好まれる色 嫌われる色』，青娥書房。
- 車貞玖・野口薫（2005）日本と韓国における色彩比較研究－美術学習との関連から－，日本色彩学会誌 29, 4, 338-346.
- 車貞玖・横田正夫・三星宗雄（2010）韓国人，日本人，および日本在住の韓国人を対象とした色彩選好と思考スタイルとの関連性，神奈川大学人文学研究所報 43, 13-24.
- スミス D.L.（川向正人訳『アメニティと都市計画』，1977 年，鹿島出版会）。
- 東京商工会議所（編）（2001）『カラーコーディネーター 1 級 環境色

彩』，東京商工会議所.

和辻哲郎（1979）『風土 人間の考察』，岩波文庫.

吉田愼悟（2005）『景観法を活用するための 環境色彩計画』，丸善株式会社.